

スコットランド 滞在記



村田 陽子 (むらた ようこ)

前・在エディンバラ日本国総領事館広報文化担当
国土交通省北海道局開発連携推進課上席開発計画専門官

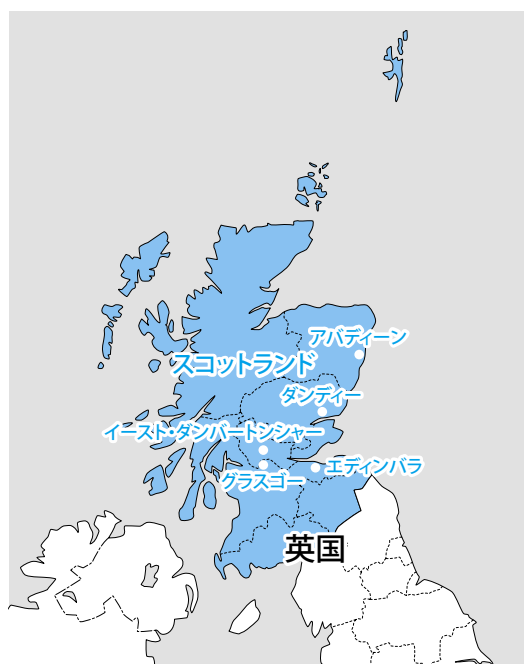
2001年北海道開発局入局、岩見沢河川事務所配属、札幌開発建設部本部にて水管理・予算計画に係る業務を担当、本局河川計画課にて予算編纂・企画等を担当、再び釧路河川事務所、幌延河川事務所、千歳河川事務所の現場事務所を経験し、2016年3月から3年間にエディンバラ日本国総領事館にて広報文化を担当、2019年4月より現職。

はじめに

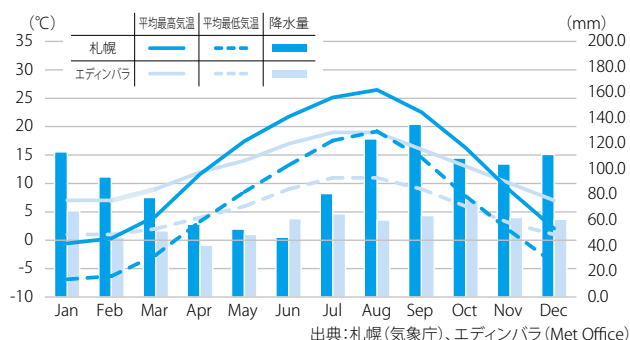
日本人の海外旅行ランキングで上位を占める国・地域は、調査会社によって多少結果が異なるものの、ハワイ、台湾、韓国といった地域が人気のようです。おそらく渡航時間という条件に関わった結果と思われますが、渡航時間が多少長くてもよいという条件を追加できるなら、私は是非一度はスコットランドを訪れてみることをお勧めしたいです。特に英国と日本の関わりについて身近なものの誕生・発明の歴史を辿ると、その多くが「スコットランド」にルーツを見ることが多く、歴史好きの人ならなおさらお勧めです。

それでは、スコットランドの首都エディンバラにある日本国総領事館に広報文化担当として勤務した3年間について、「日本」と関わりのあった出来事を織り交ぜて、誌面の限りスコットランドをご紹介します。

高緯度に位置し、日本との時差はマイナス8-9時間（夏-冬時間）あるスコットランド、暖流と偏西風の関係で温和な気候であり、北海道と比べ夏は暑過ぎず、冬は寒過ぎず、北海道育ちの方であれば1年を通して過ごしやすと感じる地域だと思います。年間を通してシャワー（Shower）という短時間の小雨がよく降りますが、平均年降水量は約700mmで、日本に比べ通年乾燥しているというのが実感です。また、1日のうち短時間のシャワーと晴天が繰り返されることが多く、頻繁に虹を見かけました。



スコットランド、エディンバラ図



札幌とエディンバラの気温と降雨量

町の人口倍増シーズン、エディンバラ祭り

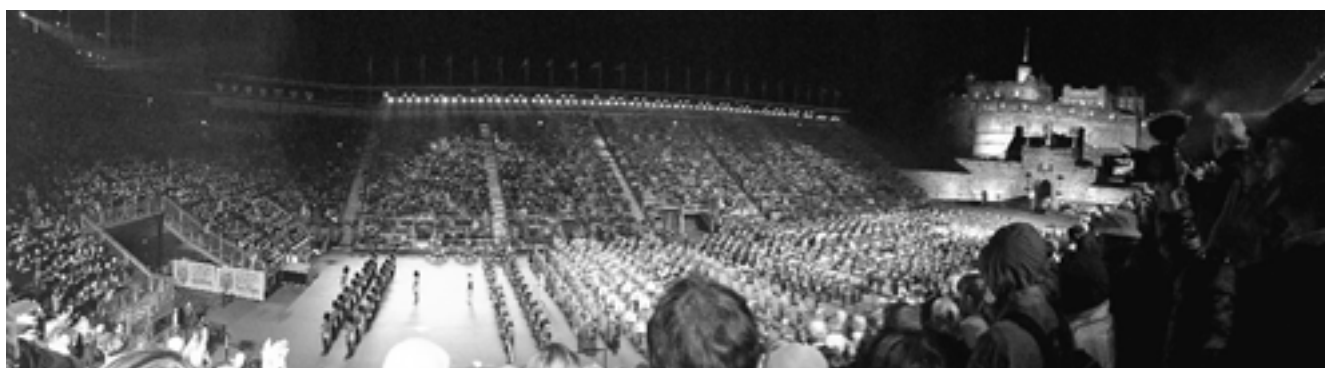
勤務した「エディンバラ」、まだ日本では耳慣れない町名かもしれませんが、町中のあちこちで開催される夏のお祭りは世界的に有名で、何千ものパフォーマーと何十万人もの観光客が国内外から来訪するため、大変な経済効果がもたらされています。

ヨーロッパをはじめ、外国からの来訪者が圧倒的に多く、エディンバラの街はいつもの倍以上の人で溢れかえります。お祭り期間は長く、7月下旬から8月末までの期間をメインとして、いろいろなジャンルのお祭りが開催されます。エディンバラ国際フェスティバル、エディンバラ・フェスティバル・フリンジ(Fringe)、エディンバラ国際映画祭、ロイヤル・エディンバラ・ミリタリー・タトゥー、エディンバラ・ジャズ・ブルース・フェスティバル、エディンバラ国際ブックフェスティバル等様々で、会場も正規のイベント会場ばかりでなく、博物館、ギャラリー、映画館、図書館、広場、道路、大学の大講堂や教室、大聖堂、教会、パブ(バー)、そしてなんと2階建バスまでもが会場となり、街中のいたるところを活気づかせます。公演時間も数時間のものから数十分のもの、有料のもあれば無料もあり、一日に複数のものを楽しむことができます。

また、英語圏でない観光客が楽しめるものもたくさんあるといった点も、多くの観光客が押し寄せる理由の一つだと思われます。さらに、スコットランドは高緯度のため、夏は夜9時頃まで明るく、観光客はその分遅い時間まで楽しむことができ、この期間は遅い時間まで街が賑わいます。

「エディンバラ国際フェスティバル」と「エディンバラ・フェスティバル・フリンジ」、そして「エディンバラ国際映画祭」は1947年から始まっています。「エディンバラ・フェスティバル・フリンジ」は、「エディンバラ国際フェスティバル」に招かれなかった劇団が国際フェスティバルの周辺で自主的に公演をしたことが始まりだそうです。(因みに、フリンジ(Fringe)とは、周辺にあるものという意味)今では国際フェスティバルの会場を何重にも取り囲んだエリアで、様々な場所が会場となり、規模はまだまだ拡大しているようです。一つの会場だけでも毎日十数前後の公演等があるため、見たいものを探すには少々根気が必要です。また、公演の合間や観賞後は、レストランやパブで、地元のビールやウィスキー、フィッシュアンドチップスやスコットランドの郷土料理のハギス(羊の内臓のミンチ、麦、野菜、ハーブ等を羊の胃袋に詰めて蒸すなどしたスコットランドの伝統料理)などを楽しみ、徒歩圏内で盛りだくさんな観光が楽しめます。パフォーマー同士もフェスティバルを通じて交流が図られるようで、この点もエディンバラ祭りのすばらしさだと思います。

広報文化の仕事として、このお祭りに日本から参加するパフォーマーの公演を観賞する機会が何度ありました。中でも、日本から参加する和太鼓グループの演奏は人気で、演奏終盤はスタンディングオベーションになることも珍しくなく、外国に赴任したことで和太鼓のすばらしさを改めて認識しました。



エディンバラフェスティバル：エディンバラ・ミリタリータトゥー

もう一つ、日本からの参加といえば、赴任2年目の2017年に日本が初参加した「ロイヤル・エディンバラ・ミリタリー・タトゥー」についても紹介します。1950年から始まっており、この年は68回目の開催で、二十数カ国の参加団体の一つとして日本が招待されました。ミリタリー（軍隊）が演奏するタトゥー（太鼓）というのが共通点で、各国の文化・芸術の特徴を音楽とダンスに織り交ぜ、軍隊やダンサーらがエディンバラ城の青空広場で約1か月間（日曜を除く）毎晩披露します。この広場には約9千人収容できる仮設スタンドが毎年設置されます。エディンバラ城は、エディンが意味する「険しい斜面（崖）の砦」に建てられており、崖から少し張り出した仮設スタンドは下から見るとかなりの迫力です。構造物に関心がある方なら、この点も必見の価値があるかもしれません。

2017年、日本の陸上自衛隊中央音楽隊は初参加にもかかわらず、すばらしいパフォーマーに送られるというソード（剣）をミリタリータトゥー事務局より授与されました。決め手は大観衆を毎晩魅了した振袖姿で登場した自衛官歌姫だったようです。この年、2回鑑賞する機会を得たのですが、自分自身もエディンバラ城の大広場に響きわたる日本の自衛官の歌声に感動しました。全ての演奏が終わって、皆が席を立てて帰る際、なんとも温かいことに、私はただの観客の一人に過ぎないのに、日本人というだけで私や私以外の日本人に「Thank you.」と言ってくくださる方々がたくさんいました。このことも、赴任期間において印象深い貴重な思い出の一つとなっています。

ニッカウキスキー創設者の妻リタさんの故郷

2014年の秋から放送されたNHK朝の連続テレビ小説「マッサン」（ニッカウキスキーの創設者竹鶴政孝）

の妻リタ夫人（本名：ジェシー・ロバータ・カウン）の故郷がスコットランドということも多くの方がこのテレビ番組で知ったかと思います。私もその一人です。リタさんはスコットランドの西の町、イースト・ダンバートンシャーのカーキンティロックという町で育ち、竹鶴政孝と隣町のグラスゴーで出会い結婚、日本に移住し、余市町にて生涯を終えたことで知られています。このことが縁で、1988年10月にイースト・ダンバートンシャー（旧：ストラスケルビン）と余市町は姉妹都市提携を結んでいます。

イースト・ダンバートンシャーは、スコットランドにある32の行政区の一つで、フォース・クライド運河（スコットランドの東側の北海に注ぐフォース川と、西側の大西洋に注ぐクライド川を結ぶ運河）があり、交通と交流の中心地として栄えた町で、現在もこの運河を祝うお祭りが毎年8月末に開催されています。

エディンバラに赴任して2か月程度が過ぎた5月中頃に、このカーキンティロックで「Big in Japan」というイベントが開催され、リタさんの生誕の地を知る機会がありました。このタイトルを上手に翻訳するならば、「日本で話題」といった感じでしょうか。イベント期間、リタさんが学んだ学校や竹鶴との出会い等、リタさんを紹介する展示のほか、スコットランドに在住されている日本人女性による茶道のお点前、三味線、日本舞踊なども披露され、赴任して間もなかったからこそ、スコットランドの方が日本文化をどう感じるかを知るよい機会でした。

スコットランドには他にも、エディンバラと京都府が1997年8月29日に歴史ある古都として共通点が多いこと（ともに世界遺産の街）で姉妹都市締結を、アバディーンと長崎市が2010年7月12日にトーマス・グラバーとの歴史的なつながりで友好都市締結を行ってい



カーキンティロックでの日本イベント

て、文化・芸術、スポーツ、教育、医学、産業など様々な分野にわたって交流が図られています。

多くの歴史と新たな技術を有するフォース川

エディンバラの北を北海に注いで流れている延長47kmのフォース川は、上流にスターリングという町があり、スコットランド軍とイングランド軍が幾度となく戦いを繰り広げた場所の一つとして有名です。右岸にそびえるスターリング城やその向かいの左岸のウォレス・モニュメントがこの町にあり、エディンバラから日帰りできる観光地です。河口に2015年に世界文化遺産に登録されたフォース鉄道橋が架かっており、1980年に開通して以来、今も供用され続けています。

フォース鉄道橋の建設には、その頃グラスゴー大学に留学していた日本人技師渡邊嘉一^{かいち}が携わっています。この話題は石狩川河川管理財団の機関紙「川と人 2017年7月Vol.41」に投稿させていただく機会がありましたので、ご興味ある方は是非お読みください。

本稿では、その後の話題を紹介します。

フォース鉄道橋のすぐ上流に1964年開通のフォース道路橋（以後、1964年の道路橋）と2017年開通のクイーンズフェリー・クロッシング道路橋（以後、2017年の道路橋）がパノラマの視界に収まる範囲に架かっています。1964年の道路橋は、2017年の道路橋の開通以降、タクシーとバスとバイクのみが通行可能な状況で、一般車やトラック等は2017年の道路橋を通行しています。この1964年の道路橋について、北側の町ファイフと南側の町エディンバラの一部区間を含んだ全長14マイル（約22.5km）を最大42名の乗客規模の運転者不在の自動走行バスの試験運行が2019年に行われる、というニュースが昨年（2018年）秋に報道されました。2021年からの本格運用を目指し、英国政府以外にスコットランドの交通機関やバス会社等からの財政支援で計画が進められています。運転手がいらないバスの使用に対しては地元には不安の声もあるようですが、交通渋滞の緩和等に期待がされており、個人的にも興味があるところです。

日本人建築家によるミュージアムが街を再生

エディンバラより北に車で1時間半程度に位置するダンディーという町に2018年9月にオープンしたヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム・ダンディー（以後、ダンディーV&A博物館）を紹介します。ダンディーV&A博物館は、2020年の東京オリンピック・パラリンピックのスタジアムを設計した隈研吾さんにより設計及び現場監督がされました。オープン式典には、隈さんも招かれており、来場者からの質問に丁寧に答えていたところが印象的でした。

ダンディーは、繊維業や造船業で大変栄えた港町でしたが、これらの産業の衰退とともに1970年代以降は人口流出に転じました。そこで、2001年にスコットランド政府は、ウォーターフロントと都市再生を結びつける30年計画のマスタープランを立ち上げました。スコットランド政府が掲げている地方部の再生、雇用の創出等を実現するフィールドとして注目されており、ダンディーV&A博物館はこのプランの拠点として長い年月の準備期間を経て、オープンしました。15日の一般公開と前夜祭の14日と両日参加したのですが、政界ばかりでなく、教育、文化、芸術といった様々な業界の関係者が多数招かれていました。

建物のデザインは、隈さんがスコットランドを訪れた際に、海岸の景観から創作のヒントを得たものだそう、町の人もスコットランドの海岸風景を思わせるデザインをととても気に入っているようでした。外壁はコンクリートで岸壁を思わせる素材で、内壁は木材で温かみのある素材が使われており、自然美をデザインに細かに取り入れているあたりも好まれた理由の一つだと思われます。

開館前の計画では初年度は50万人、翌年からは毎年35万人の来場数が目標とされていましたが、開館後約半年で50万人の来場者に達したという報道が今年3月



ダンディーV&A博物館

末にありました。想定以上の来場者があるのはうれしい限りですが、宿泊施設や駐車場などの整備が急がれつつあるようです。また、来場者をリピーター化するために、博物館は常に飽きさせない展示を行う必要があります、プラン作りをされている関係者は、常に忙しい中にも彼ら自身が計画作りにエキサイトしているように見えました。

他に博物館に関しては、エディンバラのスコットランド国立博物館とグラスゴーのバレル・コレクション美術館もホットな話題です。スコットランド国立博物館は長期に亘^{わた}たりリニューアルの最後のプロジェクトが完了し、今年（2019年）2月から日本の展示を含む東アジア常設展がオープンしました。バレル・コレクション美術館は、現在リニューアル工事中で、その一部の所蔵品の巡回展が、2018年10月から来年2020年1月末までの期間、日本で開催されています。

100年前の日本庭園が復活

2018年に正式に開園されたエディンバラより北に車で1時間弱のところに位置するドーラという町にある日本庭園について紹介します。

この庭園は今から約100年前にエラ・クリスティーさんという女性が京都を訪れた際に日本庭園に魅了されたことがきっかけで造られました。1908年にクリスティーさんが所有する土地にロンドンに留学中だった庭園デザインを学んでいた日本人女性により、小川を堰^{せき}き止めた7エーカー（約3ha）の池などからなる日本庭園が造られ、その後も日本人庭園師により増築され、見事な庭園が築かれました。20世紀半ばには多くの来園者が庭園の散策を楽しんだようです。しかし、クリスティーさんが亡くなり、その10数年後の1963年に近くに住む10代の少年らによって庭園はことごとく破壊され、その後、放置されたままとなってしまいま



ドーラの日本庭園

した。2013年に海外にある日本庭園を研究している日本庭園の専門家が、初めてこの場所を訪れ、修復を望んでいた土地所有者と出会い、2014年から修復プロジェクトがスタートし、約5年の歳月を得て見事修復され、一般公開がスタートしています。

修復プロジェクトは、過去の写真等の資料収集に始まり、その資料を頼りに現地測量をし、地元のボランティアの協力を得ながら池全体を覆っていた樹木の除去など、新たに作るよりも大変な作業があったようです。その甲斐^{かい}あって、多くの関係者の協力によって見事な庭園がよみがえっており、現在も庭園をより多くの方に快適に楽しんでもらおうと、周辺には関連施設の整備が進められています。また、昨年（2018年）と今年（2019年）、日英文化年間^{*}のプロジェクトとして桜の苗木が庭園とその関連施設に園芸を学ぶ学生らによって植えられました。数年後に見られる新たな景観が楽しみです。

おわりに

スコットランドでは風力や波力による再生エネルギーの取組や、かつての使用言語ゲール語の普及、また広報文化担当として日本文化普及で訪れた延べ60校を超える学校訪問のことなど、他にも紹介したいところですが、冒頭にも記載しましたとおり、誌面の関係から何点かに絞り紹介しました。本稿で紹介した施設等、もしもスコットランドを旅行する機会があれば、是非お立ち寄りください。

さて、スコットランドに勤務した3年間、最初は戸惑いや苦勞もありましたが、3年間住むとかなり馴^{じゅん}化した部分もあったのか、日本に帰国する頃は、去るのが寂しいとも感じました。この寄稿文作成によって、スコットランドでたくさん撮り溜めた膨大な写真データを見返すことができました。写真を見ながら思ったこととして、スコットランドは100年以上経過した歴史的な出来事や施設を大事にしつつ、歴史的建造物の活用・復元と新たな技術を取り入れ、観光資源^{観光}に繋^{つな}げて経済を発展させている地域だと、改めて感じました。

※ 日英文化年間

2019年ラグビー・ワールドカップと2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を橋渡^{つな}しする形で、英国において進められおり、日英両首脳間で合意されたビジョンに基づいている。